

国境なき医師団 ガザ南部での活動報告

命つなぐ治療ままたまならず

8日に帰国の 中嶋優子さん

国際医療組織、国境なき

き医師団日本会長で救急医・麻酔科医の中嶋優子さんが13日、パレスチナの方サ南部での活動を報告しました。

国境なき医師団はヨロップパを中心に多国籍チーム13人をガザ地区に派遣し、南部のハンユニスにあるナセル病院で活

政治の力で戦争止めて



●ガザ南部にあるナセル病院の手術室で術後の重症乳児を診る中嶋優子さん(中央)＝11月20日、国境なき医師団提供。ガザ南部の状況を報告する国境なき医師団日本会長の中嶋優子さん(右)と同事務局長の村田慎二郎さん＝13日、東京都内



助。中嶋さんはチームの一員として11月14日から滞在し、今月8日、帰国しました。

「毎日空爆があり、そのたびに患者が運ばれてくる。骨折と言っても骨が砕けるなど、腫瘍度が残っており、1日後亡くなりました。」「命をつなぐためにもそのあとの治療がままならない。延命の意味を考えてしまふ」と涙をぬぐいしました。

自身も身の危険を何度も感じたと言います。「停戦の前日の11月23日、停戦があけた12月1日は、空爆が長く激しく続き、周りの人に、政府を責めた。停戦の初日は病院も落ち続けていたけれど、翌日からは北部か

らの避難民でまたあふれていた」と語りました。

南部の空爆が激しくなり、国境なき医師団のチームは病院から一時退避することになり、中嶋さんはその文インジニアで帰国しました。「私は帰る選択肢があるが、ガザの市民は耐えるしかない。一刻も早い即時停戦とその継続を求めます」と訴えました。

国境なき医師団日本事務局長の村田慎二郎さんは「一時的な休戦ではなく持続的な停戦を」「人道援助で戦争は止められない。政治の力で止めるしかない」と日本政府を含む各国政府にたいし、停戦のためのあらゆる影響力の行使を求めました。

「多々の人にパレスチナの現状に関心をもち、周りの人に、政府を責めた。停戦を呼びかけてほしい」と訴えました。